
本日のおやつ。

麦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本日のおやつ。

【Nコード】

N7132Q

【作者名】

麦

【あらすじ】

小説同盟「本日のおやつ。」にて提案されたお題についての三題噺を投稿します。この小説は「麦」の投稿する「本日のおやつ。」です。

感想などは此方か、もしくは「本日のおやつ。」に頂けると嬉しいです。

【犬兎のお題】 「魔法使い」 「時間制限」 「なんでも思い通りになると思った」

タイトル：魔法使いの定義と、ある兄妹の会話〜ブラコンな妹さん風味〜

「犬兎のお題」「魔法使い」「時間制限」「なんでも思い通りになると思った

」

突然ですが、あなたは魔法使いを信じますか？

大抵の人はこう答えるでしょう。

「そんなのいるわけがない」

でも、初めからそう思っていたのでしょうか？ そんなことは無い
と思います。

幼少期、というと大げさな気もしますが、まだあなたが小さい時、
テレビや絵本などで見る魔法少女や魔女、ゲームなどに出てくる魔
法使いや魔術師が実在してるのではないか、自分にも魔法が使える
のではないかと考え、試してみたりしたことがあるはずです。

3

しかし、大人になるにつれて社会の『現実』と『常識』を学んでい
き、最後には皆が口をそろえて言うのです。

「魔法使いなんていない」と。

私は、そうは思っていないません。

大人から見れば馬鹿馬鹿しく、ありえないことなのでしょうが、魔
法使いは実在する、と考えています。

「子供から大人になるほんの一瞬、理想と現実を併せ持つその期間
だけ、大人になるという絶対に逃れられない時間制限の付いた中で
だけ、人は『魔法使い』になれる」

これが私なりの魔法使いになるための条件です。

こんなのは所詮現実を見たくない子供の戯言なのでしょう。

私も数年後には、常識に負け、現実を見ることになり、大人になっていくのだと思います。

でも、それでも考えてしまいます。私は今、魔法使いなのではないかと。

体には若さから来ているのであろう生き生きとした力があふれ

心には大きな希望と小さな絶望が含まれ

自分にはなんでもできるのではないか、という気さえしている今の瞬間は、自分がどんな魔法でも使える魔法使いの一員であると思うのです。

「なんでも思い通りになると思ったら大間違いだっ！」 大人は言います。

それは、厳しい現実を見てきた経験からくる言葉で、おそらくどうしようもないくらいに正しい言葉でもあるのでしょう。

そう、『経験』からくる言葉。

つまり、そんな言葉は、私たちには想像もつかないような、大きな壁に当たったことのある大人だからこそ、言ってくるのではないのでしょうか。

しかし、社会に出たら味わうであろう苦しみをほとんど何も知らない私たちなら、こう思うはずです。

「そんなことやってみないとわからない!!」

その思いこそが、我々を魔法使いたらしめるのです。
困難を知らない私たちが何を怖がる必要がありますでしょうか！
立ち上がる時、それは今なのです!!」

「……何やってんの？」

ドアを開けながら、そんな言葉と共に兄が入ってくる。

「あ、兄さん。良い所に来たね。今の聞いてた？」

「ああ、聞いてたってか聞こえてきたけど、なんだ今の新興宗教でも起こしそうな勢いの演説は」

あきれ顔でそう尋ねてくる。

「明日の課題だね。クラスの半分以上が共感を持ってくれる演説をしろって担任の先生が」

「どついう課題だよ、それ」

「さあ？先生の考えることなんて私にはわからないもの」

「……そんな怪しい演説、親父たちが聞いたらかなり騒ぐだろうから頼むから小さな声でやってくれ」

これ以上話しても意味がないと判断したのか、兄は部屋を出て行くとする。

そして、思い出したかのようにつぶやく。

「あと、出来ればあまり魔法使い魔法使い言わないでくれると助かる」

「なんか言つたー？」

「いや、なんでもない」

少し焦ったようにして、今度こそ部屋を出て行った。

「……もう少し押しが必要かな？」

現在魔法使いへの階段を数段ぬかして駆け上がっている兄への攻撃という名のからかいは、まだやめられそうにない。

「ほんと、出来の悪い兄を持つと大変だなあ」

そして、その兄に恋をしてしまったのだから、さらに大変なんだよなあ……

思わずため息をついてまう。

「いつそのこと、本当に魔法でも使えたらいいのに」

【彰人のお題】「アルバム」「友達」「引越し」(前書き)

タイトル：今日は楽しいお引っ越し？

【彰人のお題】「アルバム」「友達」「引越し」

「もう4年……か」

パソコンに向かって座りながら、一人呟く。

自分が大学を出て、今働いている出版社に入社してから6年。

一年後、雑誌に自分の連載記事を書かせてもらえることになった。

——といっても、地方の出版社が出している有名でも何でもない雑誌だったのだが。

初めは反対していた両親も、息子が書いた記事が雑誌に載った途端に態度が裏返った。

やはり、親としては自分の子供が書いたものが形になったのがうれしかったのだろう。

そういえば、新人が一年で連載、と聞くと凄いという友人もいるが、実はなんてことない。

記事を書けるのが、自分しかいなかったのだ。

内容は、ここ数年で急激に市場が拡大してきたいわゆる「ネットゲ」の紹介記事。

おおそ中年というカテゴリーに分類される他の社員（趣味はゴルフか麻雀）には書けないが、会社が生き残っていくにはほぼ外せない。

そこで、白羽の矢が立ったのが、高校の時からいくつかのネットゲをプレイしていた自分という訳だ。
その記事は今年で連載5年目。

では、さっきの4年というのは何か？

答えは至極簡単。

自分が今起動しているこのネットゲを始めてからの年数だ。

記事を書くのに慣れてきて、本腰を入れてプレイするものを決める
ときになんとなく始めたゲーム。

これが結構面白く、ゲーム内で友達を作ったりもした。

仕事のために始めたゲームだが、すでに自分から望んでプレイしているといっても過言ではない。

だけど、現実というのは厳しいもので。

ブームに乗って出来たいくつかのゲームは、出来た時と同じように
どんどん姿を消していった。

このゲームも、かなりもった方だが結局運営している会社の倒産で
もうすぐ終わりを迎える。

しかし、ゲームのシステムが気に入ったらしく、大手のゲーム会社が
運営を引き継ぐことになった。

サーバーなどはその会社のものに移転するが、データは移動させれば引き続き使用可能。

この知らせを聞いた時には、嬉しさのあまりチャットで仲間たちと一晩中盛り上がり過ぎてしまった。

たかがゲームのデータといえど、そこには数年分の自分の苦労が詰まっているのだ。

データの移動はプレイヤー個人個人で行うことになった。

運営側が一気に移動すればいいだけの話だが、あまりにも多くのプレイヤーが登録・放置されていたため、現在も続けている人数を調査するのが目的らしい。

操作自体は簡単。元のサーバーで用意された引っ越しセンターエリアに行き、サーバーの引っ越しを選択するだけだ。

こんな風に移動させるなんて話聞いたこともないので、おそらく運営スタッフ達も大変だろうに……知ったこっちゃないけど。

さらに、引っ越し作業中にプレイヤーが退屈しないような工夫もある。

移動中の画面には、引っ越し前にゲーム内で撮影したスクリーンショットが入ったアルバムの中身を表示するのだ。

やはり、こんな話は聞いたことがないので以下略。

まあ、そんな訳で。

現在自分の目の前には様々な画像が映し出されている。

初めての勝利の時の画像

自分に色々なことを教えてくれたプレイヤー達と撮った画像

自分がギルドを始めた時の画像

その他にも様々な画像が——自分がこの世界の住人だった証が表示されている。

中でも、一際自分の心に残っているモノ。

それは、このゲームを始めてからずっと一緒にプレイしてきた仲間と撮った一枚だった。

たまたま始めた時期が一緒に、二人してフィールドで迷っていると、そこをベテランのプレイヤーに助けられ、ついでとばかりにこのゲームのいろはを教え込まれた。

そして、その縁で良くパーティを組むようになり、どんどん親交を深めていった。

一応、創設者は自分になっているが、ギルドの立ち上げも二人で行ったようなものだ。

向こうはそんなことないと言うが、少なくとも自分はそう思っている。

「お」

チャットウィンドウが開く。

> 引っ越し中かい？

噂をすればなんとやらだ。

> おうよ

> 自分もだよ

> スクショ見てて懐かしいこと思い出してたww

> 確かになww

> …… もう随分経つんだな。

> なにが？

> 俺たちがパーティー組むようになってから

> 確かにね

> 最初はこんなに長い付き合いになるとは思わなかったww

> それは俺もww

> なんてこんなに長く組んでるんだろうな

> 酷っΣ(・・)

> 変な意味じゃなくて

> …… 俺は、楽しいから一緒にやってるよ

>……俺も。

>……………

>なんだこの告白しだしそんな空気はwww

>

>恥ずかしいからまたあとでwww

ウィンドウが閉じる。

どうやら変な質問をしたせいで呆れられたようだ。

まあ、後で謝っておけば良いだろう。

メールを送ったり、完了後の予定を話している内に、作業が終了したと画面に表示される。

どうやら取材再開のようだ。

新サーバーになったのだ、記事にすることはいくらかでも見つかるだろう。

あいつも許してくれたし、一緒に回ってみるとしよう。

自分を奮起させるために声を出してみる。

「さて、今日も頑張りますか」

【彰人のお題】「アルバム」「友達」「引越し」「後書き」

と、いう訳で。「本日のおやつ」バージョン麦その二でした。

今回はネタ出し一瞬書くのに数日という駄目な感じ満載のものになりました。

携帯向けの編集はまた今度。

最後に。

ここまで見てくださった皆様とこのような機会を与えてくださった彰人さんに最大限の感謝の意を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7132q/>

本日のおやつ。

2011年10月8日17時22分発行